



Data

監督：光石富士朗
 原作：森下裕美『大阪ハムレット』
 （双葉社刊）
 出演：松坂慶子／岸部一徳／森田直
 幸／久野雅弘／大塚智哉／
 加藤夏希／白川和子／本上
 まなみ／間寛平

👁️👁️ みどころ

岸里・玉出を舞台とした大阪下町の人情噺に、松坂慶子が肝っ玉オカンとして重量感と存在感タップリに登場！そして、最近落ち目となった亀田三兄弟に代わって、キャラ豊かな久保三兄弟に注目！父親の死亡直後、久保家に転がり込んできた父親の弟孝則は、ひょっとして『ハムレット』における亡国王の弟クローディアス？すると、今オカンの腹の中にいるのは誰の子？そして、俺は誰の子？そんなミステリー仕立てのストーリー(?)は、意外にも笑いとお涙の感動作。ええい、思い切って星5つ！

あの美女が、今はこんなハマリ役に！

松坂慶子といえば、日本アカデミー賞主演女優賞等を連続受賞した『青春の門』（81年）と『蒲田行進曲』（82年）が代表作。また、テレビドラマ『水中花』（79年）で大ヒットした『愛の水中花』を、スラリとした美脚を悩ましげな網タイツに包んで歌う姿が今でも目に焼きついている大女優。1952年生まれ彼女の彼女は、2008年のNHK大河ドラマ『篤姫』の幾島役でもどっしりとした存在感を見せつけたが、『大阪ハムレット』では大阪下町のオカン久保房子役を重量感いっぱい(?)に演じている。

死亡した夫ヒサノリ（間寛平）のお通夜の席で、故人の悪口を並べたてておしゃべりに興ずる隣人・知人たちに怒るところか、「ホンマにそうやなあ」としゃべりながら入っていたり、お通夜の席に突然現れて泣き崩れたヒサノリの弟だと称する叔父の孝則（岸部一徳）が四十九日も済まないうちにブラリと家の中に入り込んできてもスンナリそれを受け入れて奇妙な共同生活を始めたりと、房子の肝っ玉はかなり太そう。そして、太いのは肝

っ玉だけではなく身体つきも太い。胸の膨らみや腰の張りは、これぞ「大阪のおばちゃん」を象徴するたくましさだ。またヘルパーとして昼間勤めている病院で介護している老人から手を握られても嫌がらないし、バイトとして週何日か勤めている夜のスナックでは、酔客と抱き合いながらのデュエットも平気。しかも、映画中盤からは「また妊娠したわ!」とシャーシャーとのたまうため、それを聞いた私が三男の宏基（大塚智哉）と同じように思わず「誰の子供・・・?」と口走りそうになったのは当然。

どうもその疑問は仏壇に祀られているヒサノリも同じだったらしい。そしてこの点についての何ともおおらかな回答がこの映画の最後のシーンだから、それに要注目!それにしても、若い頃は絶世の美女だった松坂慶子が、今はこんなハマリ役に!

久保三兄弟の個性の強さは亀田三兄弟以上?

東京生まれの松坂慶子が大阪弁のセリフをきっちりマスターしていることに感心したのは、『秋深き』（08年）のヒロイン川尻一代役を演じたサトエリこと佐藤江梨子と同じだが、これにはネイティブな大阪弁をしゃべる久保三兄弟の協力もあってらしい。

亀田三兄弟の長男興毅は、2006年8月のファン・ランダエタとのWBAライトフライ級タイトル戦においてファイティング原田、井岡弘樹以来日本人として3人目のタイトルを獲得したが、それは何とも「微妙な判定」にもとづくもの。また、「浪速の弁慶」を名乗る次男の大毅は2007年10月11日、WBC世界フライ級チャンピオン内藤大助に日本人最年少で挑戦したが、そこでコテンパンにやっつけられたうえ、投げ技による反則が大きく非難され、1年間のライセンス停止処分という何ともみじめな結果になった。

これ以降、少し言動がおとなしくなった感のある、興毅、大毅、知毅の亀田三兄弟は当然ネイティブな大阪弁だが、中3の政司（久野雅弘）中1の行雄（森田直幸）小学生の宏基の3人も岸里、玉出界隈で生まれ育った男の子だから、当然その大阪弁はネイティブ。もっとも同じ大阪弁でもヤンキーでケンカっ早い行雄の大阪弁と、女の子になりたいと思っている宏基の大阪弁は全然違う。また、中3のくせに政司がやけに大人にみえるのはその顔つきや風貌のせいもあるが、どことなく落ち着いたしゃべりの大阪弁が寄与しているはず。

しかして、「あの父親にしてあの子あり」の亀田三兄弟の個性も強烈だが、「あの母親にしてあの子あり」の久保三兄弟の個性の強さはそれ以上・・・?

なぜこんなタイトルに? その1

「大阪ハムレット」とは何とも奇妙なタイトルだが、一度聞いたら絶対に忘れられない名タイトル。タイトルに「大阪」が入ったのは、主人公となる大阪のおばちゃん房子をはじめ登場人物たちがみんなコテコテの大阪人であるうえ、舞台が大阪の下町だから。とはいつても、東京は山の手と下町がハッキリ分かれているが、大阪の下町って一体どこ?

それは 地下鉄四つ橋線の岸里駅、玉出駅、南海電鉄本線と高野線の岸里玉出駅、阪堺電気軌道阪堺線の東玉出駅が交錯する岸里、玉出界隈。つまり、大阪の下町情緒、下町風景が色濃く残る地域だ。

なぜこんなタイトルに？ その2

他方、タイトルに「ハムレット」が入ったのは一体なぜ？それは担任の先生から「久保くんはハムレットやなあ」と言われた次男行雄が「そりゃ何のこっちゃ？」とばかりに急に小説『ハムレット』を読み始める中、久保家の家庭内の様相が『ハムレット』に近いことを認識していくから。しかし、久保家の何が「ハムレット」なの？

それは第1に、デンマーク王子ハムレットの父親は弟のクローディアスに殺され、妻ガートルードまでクローディアスに奪われたわけだが、ひょっとしてヒサノリの死亡後久保家に入ってきた孝則はオカンまで奪うの？そんな心配をしていたら、オカンが妊娠。そりゃ一体誰の子？そう考えると、ハムレット家と久保家の家庭内の様相はそっくり・・・？

第2に先王の亡霊が夜毎城壁に現れ、クローディアスへの復讐をしきりにハムレットに要請したのと同じように、父親の顔と似ていない自分の出生の秘密に思い悩む行雄の前に、時々ヒサノリの亡霊が現れるから。ヤンキーの行雄が文学青年のように『ハムレット』にハマっていく姿はいかにもアンバランスだが、そのアンバランスさを笑い飛ばしながらもどことなく泣けてくるから、「大阪ハムレット」というタイトルは最高！

長男政司の恋愛モードは？

この映画ではケンカっ早いヤンキーの次男行雄が「ハムレット」風の物語(?)の進行役として大きな役割を果たすが、長男政司は中3のくせに女子大生の明石由加(加藤夏希)と恋愛モードにハマっていくストーリーでキャラを發揮する。原作者森下裕美のコミックの中で由加がどんな女性として描かれているのかわからないが、本作では由加が恋人に父親像を求める極端なファザコン娘として登場する。したがって、妙に大人びた政司が彼女の恋人にはピッタリ・・・？

由加が今本当は嫌いな出身地に戻ってきたのは、中学校で教育実習をするため。政司と由加の出会いが偶然だったが、仕掛けたのは政司。「大学生？どこの大学？〇〇大学？大学？」と聞かれた政司がつい「〇〇大学」と答えたことから、2人は恋愛モードに入り、急速にいっしょになる。ところがある日、政司が教育実習の先生として紹介された女性を見ると・・・？

「女の子になりたい！」はちょっとヤバイ

おしゃれには全然縁のない次男行雄と大違いで、自分で髪の毛を切るなどヘアスタイルに固執しているのが三男の宏基。最近には性同一性障害の悩みや性転換の話などもおおっぴ

らに議論されているが、小学生の宏基は今、美しいものにあこがれる自分に悩み始めている様子。そこで、小学校の授業で「ボクは〇〇になりたい!」「私は になりたい!」と語り合っている時、宏基は思い切って「ボクは女の子になりたい!」と発言したから、一瞬先生や同級生たちはビックリ。また、それを打ち明けられた母親房子もビックリ。そんな宏基に対する、学校と家族の対応は?

宏基の悩みをストレートに受け止め、「自分の好きなように生きればいい」とアドバイスしたのは房子の妹で入院中の亜紀(本上まなみ)。元気いっぱい姉と違って繊細な神経の持ち主(?)である亜紀は今末期ガンと闘っていたが、全然弱みを見せないところは姉譲り・・・?この映画は後半、学芸会でのクラスの出し物『シンデレラ』で宏基がシンデレラ役に抜擢されたことによって生まれる笑いと涙の感動物語が控えているから、それに注目!舞台が大拍手の中で終わったのは良かったが、宏基にはきっと今後いろいろな試練が待ち受けているはずだ。

負け組の中年男にもこんな生き方が

父親の死亡後、久保家に転がり込んできた孝則は全然父親に似てないけどホントに父親の弟?そうだとしたら、なぜ今まで俺たちは1度も会ったことがないの?オカンはなぜ、いとも簡単に孝則を同居させたの?ひょっとして・・・?しかも、奇妙な同居生活が始まったら数カ月後に妊娠発表がされたから、オカンのお腹の子はひょっとして・・・?久保家三人兄弟がそれぞれのレベルでそんな疑問を持ったのは当然だが、それに対して房子はもちろん、当の本人の孝則も何の説明もしないところがこの映画のミソ。光石富士朗監督はそこらあたりをミステリー風に(?)仕立て上げ、大阪下町の奇妙な人情漸を完成させた。

そこでポイントは存在感と重量感いっぱいの松坂慶子に対抗して、いかにもフワフワで頼りない、それでいて絶対的に人のいい中年男孝則を誰がどのように演じるかということ。そこで白羽の矢が立ったのが岸部一徳だが、これが絶妙。まだまだ女の魅力いっぱいの松坂慶子演ずる房子とダンスをしても、手を握っても、挙げ句の果てはお腹に耳をあてて赤ちゃんの鼓動を聞いても全然スケベたらしくならないのは、岸部一徳の人の徳のせい?

百年に1度の経済危機が日本を襲っている未曾有の時代、こんな男はきっと真っ先にリストラ対象だが、負け犬の中年男だってこんな生き方が・・・。

思い切って星5つ!

2008年は邦画と洋画の興行収入の比率が59.5%対40.5%となり、「邦高洋低」の傾向がはっきり示された。これには 断トツの155億円をあげた『崖の上のポニョ』の貢献が大きい。東宝の一人勝ち(5位の『相棒-劇場版-』を除き、ベスト9まですべて東宝配給)、テレビ局との連動による大ヒット(2位が『花より男子ファイナル』)

3位が『容疑者Xの献身』、4位が『ザ・マジックアワー』等)の特徴がある。したがって、ホントにいい映画が必ずしも大ヒットするわけではないし、大ヒットした映画がホントにいい映画とは限らないところが面白い。しかし、この『大阪ハムレット』の興行収入はHow Much?

それは数カ月後に明らかになるが、キネマ旬報2月下旬決算特大号によれば、単館上映作品として昨年異例の大ヒットとなった阪本順治監督の『闇の子供たち』は興行収入ランキング55位以内に入っていない。ランキング55位以内の作品で私の目につくのは『母べえ』が21億円と大健闘、『アフタースクール』が5.5億円、『百万円と苦虫女』が3億円、程度。そう考えれば大阪でも単館上映にすぎない本作が10億円の大ヒットとなるのは到底ムリで、3~5億円をあげれば大健闘だろう。しかし、映画は儲けよりも作品の良し悪しが大切。そんな価値観を持つ私の独断と偏見によって『大阪ハムレット』には思い切って星5つ!

2009(平成21)年2月10日記

『大阪ハムレット』は09年の大本命?

年間200本以上鑑賞した映画評論家の中から審査員が選ばれる、大阪色の濃厚な権威ある(?)映画賞がおおさかシネマフェスティバル。その2008年(08年に大阪公開の作品に限定)のベストテンと個人賞が09年1月23日発表されたが、『秋深き』が邦画部門で見事第8位に入賞した。私の投票は9位だったから、他の審査員の目とほぼ一致していたことになる。さらに私が推した八嶋智人の主演男優賞はならず、『明日への遺言』の藤田まことだったが、『秋深き』は脚本賞を、さらに渋谷天外が助演男優賞を受賞した。

他方、主演女優賞候補は『秋深き』の佐藤江梨子の他、『接吻』の小池栄子、『トウキョウソナタ』の小泉今日子、『ぐるりのこと。』の木村多江などが突出し

ており、結局木村多江が受賞したが、私が推した小泉今日子との差はわずか? また新人賞は、私が投票した『世界で一番美しい夜』の月船さららで結果も一致したから、ここでも審査員の目はほぼ共通だったことになる。

すると、09年の候補作は?そこで注目したいのが松坂慶子主演の『大阪ハムレット』。なぜならそれは、かつての清純派美人女優を脱皮して大阪のおばさん女優に変身し(?)でっぴりと太った姿を堂々とみせる松坂慶子の演技が特筆モノだったから。09年のおおさかシネマフェスティバルは大阪を舞台とした(?)紀里谷和明監督の『GOEMON』も面白いが、『大阪ハムレット』が大本命?

2009(平成21)年6月2日記